

1911年における野球論争の実証的研究 (IV)

—大正期における「全国優勝野球大会」の地方大会主催者に関わる考察—

The positive study of baseball controversy in 1911 (IV)
—the examination on the section match promoter of “the all-Japan
(middle school) baseball championship” in the Taisho Era—

秦 真人*

Mahito HATA*

The purpose of this study was to explain a part of the interrelation between “Baseball Controversy” and “the all-Japan middle school baseball championship”. This study was investigated by analyzing the process which Tokyo-Asahi was concerned with “the all-Japan middle school baseball championship”.

As the generalization of this study, we present the following point:

The standpoint that Tokyo-Asahi had toward Student Baseball turned over in the early years of the Taisho Era. And Tokyo-Asahi contribute to the development of Student Baseball by degress. Viz. it was mended that for all Tokyo-Asahi newspaper and Osaka-Asahi newspaper were based on different editorial policy untill 1940, but they were taking a state that put in the same category “Tokyo-Asahi newspaper” and “Osaka-Asahi newspaper” within the Taisho Era.

はじめに

1915年(大正4年)8月、現在の全国高等学校野球選手権大会の前身である第一回「全国優勝野球大会」が、大阪朝日新聞社主催によって開催された。しかしながらこの大会開催の四年前、1911(明治44)年には東京朝日新聞社によって近代スポーツに対する理解が欠如していると思われるような論調で「野球害毒論」¹⁾が展開されている。その意味では、学生野球に対する「朝日新聞社」の立場がこのように短期間において顕著な変化を見せるということは、一つの矛盾であるかのように思われるところである。ところがこの点に対する従来の評価は、「野球害毒論」の基底となった教育的理念を朝日新聞社がそのまま踏襲し、学生野球の全国大会を開催することによって、それまでに現れていた弊害の昇華をはかろうとしたという解釈がなされてい

るようである。それは後年の『全国高等学校野球選手権大会五十年史』の中で、朝日新聞関係者が次のように述べていることからもうかがえる。「社内では、当時、野球害毒論をキャンペーンしたあとだけに、野球については相当の議論があった」²⁾にもかかわらず大会開催に踏み切る。その要因は様々あるが「第一の原因は、野球害毒論をかかげた朝日新聞だが、逆に『野球によって青少年を正しく、たくましく育てる』という、いまなお生きつづける大会精神をうち出した英断があったからこそだ」³⁾としている。その意味でも朝日新聞社総体の編集方針及び運営方針にもとずいて行われた「野球害毒キャンペーン」であり、ならびに同一組織の主催による「第一回全国優勝野球大会」の開催であったかのように理解されてきたものと考えられる。

しかしながら筆者は先行研究⁴⁾の中で、今日的な全国紙としての朝日新聞社「総体」として

* 名古屋大学総合保健体育科学センター

* Research Center of Health, Physical Fitness and Sports, Nagoya University

とらえること自体に無理があるような当時の未成熟な同社の組織状況下において、これまで言われてきた同一組織における「野球害毒論」のキャンペーン、そしてその脈絡から上記の理念のもとに直接的に「全国優勝野球大会」を誕生させたという構図を短絡的に描き出すことには無理があるのではないかという指摘を行ってきた。

そこで本研究では視点を変え、当初学生野球に対して否定的な編集方針を掲げていた「東京朝日新聞社」が、如何にして後年の「全国優勝野球大会」に関与していったかという視点から、地方大会の主催をめぐる展開した「全国優勝野球大会」に対する「東京朝日新聞社」の係わり方の変遷を実証的に検討する。すなわちそのことは、従来の評価が生まれる背景の一端を究明することで、「野球害毒論」の展開と「全国優勝野球大会」開催にいたる相互関係をより一層明らかにする手掛かりを得ようとするものである。

〈1〉 第一回大会に対する東京朝日新聞社の係わり方

(1) 第一回大会前後の朝日新聞社の動向

まず、野球害毒キャンペーンがおこなわれたわずか四年後に開催されることになる、第一回全国優勝野球大会に対する東京朝日新聞社の係わり方についてみていく。

筆者はこれまでに東京朝日新聞と大阪朝日新聞における掲載記事の比較分析より、野球論争後から第一回全国優勝野球大会に至るまでの期間(1911年9月～1915年6月)の両社の動向として、野球論争当時と同様に東京朝日新聞と大阪朝日新聞の編集・運営方針が相違していたことを明らかにしてきた⁵⁾。

そして、第一回全国優勝野球大会開催当時(1915年7～8月)の東京朝日新聞及び大阪朝日新聞両紙の動向も、全体の編集方針は勿論のこと学生野球に対する立場においても、東京朝日新聞と大阪朝日新聞とは全く相違していたことがうかがわれるものであったことも指摘してきた。この点については、第一回大会当時の両紙

の論調分析による考察結果の詳細を先行研究⁶⁾において付しているが概略は以下の通りである。

第一回大会当時、大阪朝日新聞が大会に関する大々的な広告記事と、数名の識者による学生野球観等の関連記事のためその紙面の大半を費やしていたという事実に対して、東京朝日新聞では従来の否定論的な姿勢は紙面から見られなくなるものの、第一回大会に関してはほとんど関与していないというような様相を呈していた。例えば、第一回大会前後の東京朝日新聞に於いては大阪朝日新聞に掲載されているような学生野球に関する記事が一切掲載されていない事は勿論のこと、大会の開催を知らせる広告記事ですら、極わずかな記事が三回ほど掲載されたのにとどまっていた。その中の最も大きく掲載された記事でさえも次の全文であった。「▽開催期日の決定／大阪朝日新聞主催の第一回全国優勝野球大会は一たび其発表と共に満天下の好球家を驅つて熱狂せしめんとするの盛況を呈したり而して同大会に出陣すべき代表選手を豫選する各地方の野球大会も相次で舉行せられんとするを以て是等の便宜上、全国大会の開催期日を豫定より稍遅らしめ愈八月十八日より五日間(雨天順延)舉行の事に決定せり」⁷⁾

その他の記事は、優勝旗を紹介する小さな写真を掲載したもの⁸⁾、わずかに全国大会出場校の名前のみを列挙した紹介記事⁹⁾が掲載されたのみで、試合結果の報告も(大阪電話)というかたちで数行わずかに掲載¹⁰⁾されたのにとどまり、東京朝日新聞社は紙面に限って見ると本大会にはほとんど関与していないといつてよいものであった。

(2) 第一回大会の地方大会に対する

東京朝日新聞の立場

そして東京朝日新聞社がこの第一回大会に対する関与が消極的であったと思える事実として、全国大会出場のための地方大会のあり方にも、当時の東京朝日新聞社の立場の一端がうかがわれる。

1) 全国大会出場条件について

まず、本大会の主旨と全国大会出場のための

条件を把握するため、第一回全国大会の開催に向けて大阪朝日新聞に最初に掲載された「本社主催全国優勝野球大会」と題する広告記事を見ていく。

そこには「来る八月中旬豊中に於て舉行／各地代表中等學校選手權仕合 野球技の一度我國に來りてより未だ幾何ならざるに今日の如き隆盛を觀るに至れるは同技の男性的にして而も其の興味と其の技術とが著しく我國民性と一致せるに依るものなるべし、殊に中學程度の學生間に最も普く行はれつゝありて、東海五懸大會關西大會等を始めとし各地に其の聯合大會の舉を見ざるなきに至れり、然も未だ全國の代表的健兒が一場に會して澁瀨たる妙技を競ふ全國大會の催しあるを見ず、本社は之を遺憾とし茲に左の條件に依り夏季休暇中の八月中旬をトし全國各地方の中等學校中より其代表野球團、即ち各地方を代表せりと認むべき野球大會に於ける最優勝校を大阪に聘し豊中グラウンドに於て全國中等學校野球大會を行ひ以て其選手權を争はしめんとす（詳細は逐次發表）

- 一 參加校の資格はその地方を代表せる各府懸聯合大會に於ける優勝校たる事
- 一 優勝校は本年大會に於て優勝權を得たるものたる事
- 一 選手の往復汽車又は汽船賃は主催者に於て負擔する事」¹¹⁾とある。

そして下線部（筆者による）につきましては、後日、以下の補足がなされている。「…▲最優勝校に限る 今回的大會に對する支障と困難は又尠くない、全國の中學校を集めて試合を行ふのは元より不可能であるから其中の優勝校をして參加せしむる事にしたのであるが、各地の優勝校を決定するの亦中々容易でない、一説には最優勝校のみを取らず各大會の優勝戦に參加したる二三校を參加せしめては如何との意見もある、之は興味の上からいつても無論非常に面白いには相違ないけれども假令勝負の運とはいへ最優勝權を絶対に尊重して光輝あらしむる事に於ては何うしてもこれをその大會の代表たる最優勝校に求めねばならぬ、其の各地より數校集める事は全體を集めると同じく矢張り困難で

又必ずしも必要とはいはれない、依つて本社は優勝校に限る事とし今迄先例のない經濟上の補助をも與へて參加を容易ならしめる事にしたのである（つゞく）」¹²⁾、これについては特に次の記事につづく。「…▲所屬大會を優勝せよ 所屬大會といふと聊か變に聞えるが之は其學校所在地範圍の大會の意味である、例へば東海五懸野球大會の範圍にある學校は即ち同大會に於て最優勝者たる事を條件とするのであつて規定に於て『各地方大會の優勝校』とした點は其處にある、(中略) 故に本社の全國野球大會に參加とするには絶対に其地方大會を優勝するの必要がある…」¹³⁾とし、そして既成の大会が存在しない地域については、つぎにあるような配慮が示されている。「▲地方大會の不備 各地方に依つて大小こそあれ野球大會は目下全國に約二十ある、然し相當に内容も充實し我が社が取つて以て代表的と認め得るものとなると流石に尠い本社の殊に遺憾とする處は立派に代表的資格を具備して居ながらその開期が秋季であつたり或は夏季休暇の終末であつたりして本年の優勝校の出来るのが本社の大會以後になる一二大會のある事である、(中略) 而して我が社は此の不備を補ふ爲め特に有力な優勝試合の行はれてない地方或は其の時期の不適當な地方に於ては本社の大會に參加すべき優勝校を決定するの主意を以て各地に野球大會を行はしめる事とし京都の京津大會神戸の兵庫懸大會の如きは己に其の計畫を發表したのである」¹⁴⁾としている。

2) 第一回大会の地方大会主催について

次にこの所属大会といわれる、第一回大会当時の地方大会とその主催者を記した「參加する野球團體」と題する掲載記事を原文のまま、ここに掲載しておく。

「▲本社主催全國優勝野球大會に 今回我が社主催の全國優勝野球大會につき何れの各地方大會が其の代表選手を送るべきかは好球家の等しく一日も早く知らんとする處なるが之に對し本社今回大會の規定に依り各地方を代表して參加すべき地方大會を左の十大會と決定せり

- 一 東北野球大會 本年は特に秋田市に於

- て希望校のみ豫選試合を行ふ筈
- 二 東京都下野球大會 武俠世界社主催、今春己に舉行し早稲田實業學校はその優勝校たり
 - 三 東海五懸聯合野球大會 聯合主催、來る八月十一日より四日間三重懸富田中學校庭に於て舉行
 - 四 京津野球大會 本社京都通信部主催、來る七月二十五日より五日間京都第三高等學校庭に於て舉行
 - 五 關西野球大會 美津濃商店主催、來る八月五日より五日間豊中グラウンドに於て舉行し特に大阪府、奈良、和歌山二懸の代表校を選定す
 - 六 兵庫懸野球大會 本社神戸通信部主催、來る八月二日より三日間神戸關西學院校庭に於て舉行
 - 七 山陽野球大會 本社廣島通信部主催、來る八月六日より三日間廣島高等師範學校庭に於て舉行
 - 八 山陰野球大會 本年は鳥取島根兩懸に於て各校共同豫選試合を行ひ更に代表者を選定す
 - 九 四國野球大會 高松體育會主催、來る八月三日より三日間高松市商業學校庭に於て舉行
 - 十 九州野球大會 抜天俱樂部主催、來る七月三十一日より二日間福岡市東公園福岡商業學校庭に於て舉行

右の中己に優勝校となり確實に參加權を有し居れるものは東京都下野球大會に於ける早稲田實業學校のみにして ① 其他は何れも京津大會の來る七月二十五日より東海大會の八月十四日に至るまでの間に於て各自試合をなしたる結果始めて決定するものにして果して何れの學校がその代表者たり得るかは甚大なる興味あり唯金澤第四高等學校主催の北陸野球大會のみが己にその例年の準備完成し居り隨つて八月二十二日より五日間なる其の期間を繰上げ本社全國大會に其の代表校を送り得ざるを深く遺憾とす ②、又山陰大會は一時中絶し居りし爲本年俄に復活せしむる能はず漸く鳥取、島根兩懸に於て各自

に豫選試合を行ひ兩懸の代表者のみは選びしも選手の都合にて同地に於て決戦する能はざる事情ありそれがために一時は殆ど不参加の止むを得ざるに至りしも其後兩者に於て何れも全國大會を見學する事に決し大會數日前來阪し大阪に於て試合を行ひ山陰代表者たらしめたしとの希望あり、本社は何れにしても一校を代表として取る事なれば敢て差支なきを以て其決勝戦に於ける勝者を山陰代表校として參加せしむる事とせり ③」¹⁵⁾(下線及び丸数字は筆者による)

この広告記事を見る限り全国大会という初の試みに対する大阪朝日新聞社の苦勞がうかがえるところであるが、この記事にしたがって当時の状況をさらに補足していくことにする。

「東北野球大会」は、それまで北海道とともに青森県などが中学校の対校試合を禁止していたことや、地域的な不都合、大阪朝日新聞社の影響下になく広告が行き届かなかつたことなどが相まって、結果的に希望校が秋田中学のみであった。しかしながら前掲記事にもあるように予選なく無条件で全国大会に出場させるわけにはいかないことから、主催・後援者は特になく、秋田農業と横手中学との三校による臨時大会をおこなうことによつて、その出場權を認めているというものであった。

「東京都下野球大会」(八校出場)は、押川春浪が設立した雑誌社、武俠世界社¹⁶⁾主催によつて行われていた大会であり、すでにこの年は三月に開催されていたため優勝校が決定していた。つまり、引用史料の下線部①に記載されているように、この出場資格の条件が掲げられたときには、すでにその優勝校である早稲田実業が無条件に出場權を得るという状況下にあった。

「東海五県聯合野球大会」(六校出場)は、当時最も歴史と伝統があつた大会である¹⁷⁾。この年の第十二回大会は、当番校の三重県立富田中学が主催となり、開催された大会である。

「関西野球大会」(八校出場)は、前年1913(大正2)年から行われていた美津濃商店の主催による大会であり、この地域ではこの大会の優勝が条件としてあげられていた。しかしここでの問題として、その範囲が広範囲ということもあり、

所属大会としては大阪府、和歌山県、奈良県の中学校に制限したことである。つまり、そのため同大会を一部と二部に分割して、その三県の中学校は一部大会に参加し、それ以外の兵庫県など他県の中学校は二部大会へ参加する。そしてそれぞれ、一部と二部の優勝校が対戦して同大会の優勝校を最終的に決定し、全国大会への出場は一部大会の優勝校のみがその出場権を得るという複雑な大会となった¹⁸⁾。

「京津野球大会」(十一校出場)、「兵庫県野球大会」(七校出場)と「山陽野球大会」(六校出場)は、前掲の広告記事にあるように大阪朝日新聞社によって新たに設けられた大会であり、それぞれ大阪朝日新聞社の京都通信部、神戸通信部、広島通信部主催の大会として行われた。

「山陰野球大会」(計六校出場)は、対校競技における応援の問題に端を発し、島根県中学校長会議において鳥取県の学校との対抗競技を中止する決定をこの年の6月に出したばかりという事情を考慮して、次のように開催された。それは、大阪朝日新聞社山陰通信部後援のもとに、島根県と鳥取県の二県に分けて行われ、引用史料の下線部③に記載されているように、その両県の代表校二校が全国大会開催直前の大阪において決勝戦を行い代表権を得るという状況にあった¹⁹⁾。

「四国野球大会」(八校出場)は、民間団体である高松倶楽部が高松体育会と改称²⁰⁾し、その主催のもとに、大阪朝日新聞社高松通信部の後援という体制で行われたものであった。

「九州野球大会」(八校出場)は、福岡県の有志によって組織された倶楽部である抜天倶楽部が主催し、大阪朝日新聞社福岡通信部の後援によっておこなわれた大会であった²¹⁾。

これらを見ると、西日本地域の各地において、そのほとんどは大阪朝日新聞社による主催あるいは後援のかたちで展開されている。しかしながら、筆者が指摘してきたような従来の評価からいえば、朝日新聞社の一部として当然関与すべき東京朝日新聞社がいずれの大会においても主催は勿論のこと後援者にもなっていない。時

期的な問題から「関東大会」は除外したとしても、後に主催することになる「東北大会」などは特に第一回大会に於いては主催者もなく地方予選大会とはいいがたいものであり、朝日新聞社「総体」としての主旨に従えば、必然的に東京朝日新聞社が何らかの援助をすべき大会ではなかったかと推察されるところである。このことは、明らかに第一回大会当時の東京朝日新聞社が、「全国優勝野球大会」の開催に対して消極的であったことをうかがわせるものである。

〈2〉第二回大会以降、第五回大会まで (1916年～1919年)の東京朝日新聞社の 係わり方

第一回大会においては関与することがなかった東京朝日新聞も、すでに第二回大会では「関東大会」と「東北大会」を主催することとなり、それ以降の学生野球に対する東京朝日新聞社の立場の方向転換が行われたことが明らかにながわられた。

以下、大正期に限り東京朝日新聞が地方大会に関与していく経過を概略していく。ただし朝日新聞社が合資会社から株式会社へと移行する1919年(大正8年)を、一つの区切りとして見ていく。

(1) 第二回大会

第二回全国大会は、引用史料の下線部②に記載されているように、第一回大会において従来の所属大会の日程上、全国大会との調整ができず代表校を出場させることのできなかった「北陸野球大会」が新たに加わる。さらに前年の「関西野球大会」が「大阪野球大会」と「紀和野球大会」(和歌山県、奈良県)の二大会に分かれ、地方大会は計十二大会となる。そして東京朝日新聞社の本大会への関与は、「東北野球大会」と「関東野球大会」の二大会を主催することとなり、第一回大会時と比較して顕著な変化があったことがうかがわれる。

この変化が最初にうかがえるものとして、東京朝日新聞に掲載された次の広告記事がある。それは「大阪朝日新聞社が作夏全国中等学校優勝野球大会を主催して野球界に多大の刺戟を與

へ一大成功を以て我野球史に一紀元を劃するを得たるが同社が今夏八月中旬を卜し更に第二回大會を主催せんとするに當り本社は東日本を代表して全國野球界の爭覇戰に参加する名譽ある二優勝校を豫選する事に決し次の如く東北及關東野球大會舉行の要項を定めたり各中學校チームは奮つて之に参加し本大會をして益光輝あらしめん事を望んで已まず²²⁾という記事であった。そして「本年度の大會は便宜上大會所屬府縣を左の如く區劃し右所屬大會に於て優勝せる中等學校チームを全國大會參加有資格者とす²³⁾として「東北野球大會」の所屬府県を北海道、青森県、宮城県、岩手県、秋田県、山形県、福島県の七府県、「關東野球大會」は東京府、神奈川県、埼玉県、千葉県、群馬県、栃木県、茨城県の七府県であることを明記している。またこの記事の最後に「主催 東京朝日新聞社²⁴⁾と大きく掲げられていること、この年限りではあるが7月14日から24日までの間、八回にわたり「關東野球大會」の参加校の写真を同時掲載しながら詳細に紹介するほか²⁵⁾、予選試合の結果も紙面の約半面を費やしながらか報告する²⁶⁾という、本大會に対するきわめて積極的な態度がうかがわれた。

この方向転換に関する直接的動機については、本研究における史料からは実証することはできなかった²⁷⁾。しかし、いずれにしても東京朝日新聞社が態度を一転するにたる影響力が生じるほどの社会的な注目が、学生野球に対して集まっていたという事実は明らかである。

(2) 第三回大會

第三回全國大會へ出場するための地方大會数は前年同様十二大會と変化はない。しかしこの大會は、会場が豊中球場から鳴尾球場に移り、初めて開会式を行った大會であった。

東京朝日新聞の関与としては、「東北野球大會」は前年と変わらず東京朝日新聞社が主催し、第二高等学校の後援という体制で開催されるが、「關東野球大會」においては主催が天狗俱樂部²⁸⁾に移り、東京朝日新聞社は武俠世界社とともに後援にまわる。この主催と後援の関係、及びその移動の事情についても本研究では明ら

かにすることができなかった。そして、この大會以降東京地区に係わる予選大會においては東京朝日新聞社は主催となることがなかったことを付言しておく。

(3) 第四回大會

第四回大會が開催される予定であった1918(大正7)年は、第一次世界大戰による大戦景氣の影響により、物価とりわけ米価が急騰し、都市勤労者や下層農民の生活は困窮する中で「米騒動」が起こる²⁹⁾。このために、全國大會は代表校が集まる茶話会のみがおこなわれ、試合は中止をせざるを得なかった。しかしながら、「米騒動」の直前に行われた地方大會は、新たに二大會が追加され計十四大會へと広がり呈し、新たに追加したいずれの大會も東京朝日新聞社が関与したものであった。一つは前年まで「北陸大會」に属していた長野県、山梨県が分離し、新たに「甲信大會」として東京朝日新聞社主催のもとで開催されることとなる。他の一つは、前年までの「關東野球大會」が「京浜大會」(東京府、神奈川県)と「關東大會」(千葉県、茨城県、埼玉県、栃木県、群馬県)とに二分し、つまり「京浜大會」が追加されることとなる。「京浜大會」の主催は天狗俱樂部と武俠世界社の共同主催、東京朝日新聞社は後援の体制で行われ、「關東大會」は東京朝日新聞社の主催のもと、水戸天狗俱樂部と水戸商業學校の後援で行われた。「東北大會」については前年同様、東京朝日新聞社主催、第二高等学校後援のもとで行われ、ここで東京朝日新聞社は三大會の主催と一大會の後援というかたちで、本大會に対する関与を徐々に拡大しはじめた。第五回大會については、第四回大會と同様であったので省略する。

〈3〉第六回大會以降、第十二回大會まで (1920年～1926年)の東京朝日新聞社の 係わり方

1919(大正8)年8月5日の次の社告、
「今般本社の業務一切を八月一日より株式會社朝日新聞社へ引継ぎ致候此段謹告候也
大正八年八月一日 朝日新聞合資会社／

今般株式會社朝日新聞社を設立し前記の通り八月一日より朝日新聞合資会社の業務一切を継承致候此段謹告候也

大正八年八月一日 株式會社朝日新聞社

取締役社長 村山龍平

専務取締役 上野精一³⁰⁾

に示されているように8月1日を以て、朝日新聞社はそれぞれ「合資会社朝日新聞東京朝日新聞社」「合資会社朝日新聞大阪朝日新聞社」から「株式会社朝日新聞社」へと移行する。それについては、「第一次歐州大戦の影響により、わが國運は急速に進展して、世界五大強國の一に列し、社會の情勢も國民生活の様相も一変して、複雑多岐、あらゆる外來思想は混亂の渦を巻いて流れ込んだ感があり、新聞の使命は一層の重きを加えた。この場合、公器である新聞が個人的經營であることは何となく時代に適せぬ感を免れない。そこでわが社は新機構により社内の諸機關を活動せしむべく、四十年來の舊套を脱却した大改革を斷行した³¹⁾と『朝日新聞七十小史』に記されている。しかしながら、それ以降もそれぞれ「大阪朝日新聞」「東京朝日新聞」の紙名(題号)のもとに、紙面における編集方針などはほとんど変化なく運営されていく。このことは株式会社となったこの時点に於いても、筆者が「総体」として位置付ける今日の朝日新聞社のような統一体には至っていなかったということがいえる。

(1) 第六回大会

第六回大会が行われた1920(大正9)年は、株式相場の暴落を口火に戦後恐慌が発生した年であり、また第一回メーデーが行われた年でもある。この時期に「北海道大会」が新たに加わり、全国大会出場代表校は十五校となった。「北海道大会」は、従来からの対校競技禁止令が解けたのを機に、北海道大学野球部と函館大洋俱樂部との共同主催、東京朝日新聞社後援のもとに行われた。「東北大会」は第二高等学校野球部に主催が移り、東京朝日新聞社は後援にまわるが、他大会は前年と同様であった。つまり「京浜大会」は天狗俱樂部と武俠世界社との共同主催のもとに東京朝日新聞社は後援、「関東大会」

「甲信大会」については東京朝日新聞社が主催となって行われている。

(2) 第七回大会

第七回大会が行われた1921(大正10)年からは、当時日本の植民地であった朝鮮と満州からそれぞれ代表校を出場させて、全国大会は計十七校で行われるようになった。東京朝日新聞社が関与する地方大会においては、「東北大会」が再び東京朝日新聞社に主催が移ったほかは前年までと同様であり、三大会の主催と二大会の後援を行っている。なお第八回大会については、第七回大会と変わるところがないため省略する。

(3) 第九回大会

この年1923(大正12)年の9月には、関東大震災がおこり京浜地帯は焦土と化し、日本経済は大打撃をこうむったといわれている。しかしながら、第九回大会はその直前に開催されたため予定通り行われた。本大会は、さらに台湾代表を決める「台湾大会」が新たに加わったことと、「京浜大会」から分離して「東京大会」が誕生したことから地方大会数は計十九大会となる。そして、全国大会はその代表校十九校を集めて、より一層盛大に行われた。そしてこの年には観衆が競技場内にまで入りこみ競技試合の妨害をするに至り、年毎に増加する観衆への対応の問題が顕著となる。それは「全國優勝野球大會」が応援・観客の収容数の限界に達するほど注目を集めていたことを示すものであり、ついには甲子園球場の建設が緊急課題となった。

「東京大会」については、この年に誕生した中等学校野球聯盟という独立団体主催のもとにリーグ戦形式で行われ、東京朝日新聞社は後援の体制で関与していく。東京府が分離して「東京大会」となったため、「京浜大会」の所属であった神奈川県は前年まで「東海大会」に属していた静岡県と共に「神静大会」を開き、その所属となる。そして同大会は、東京朝日新聞社主催のもとで開催された。「北海道大会」においても東京朝日新聞社に主催が移り、前年までの「甲信大会」は「北陸大会」に属していた新潟県が新たに加わり「甲信越大会」となる。そして「甲

信越大会」も「東北大会」「関東大会」「神静大会」と同様に東京朝日新聞社が主催し、東京朝日新聞社は五大会の主催と一大会の後援となった。

また第十回大会においては、前述した観衆の収容規模との関係で全国大会会場が現在の甲子園球場に移るわけであるが、地方大会については第九回大会と同様であり、変化するところがないため省略する。

(4) 第十一回大会

第十一回大会は、「九州大会」が南北に分離して「北九州大会」と「南九州大会」とになり、「東北大会」から新たに「奥羽大会」が独立して計二十一の地方大会となる。

あらたに独立した「奥羽大会」(青森県、秋田県、山形県)は、縮小した東北大会(岩手県、宮城県、福島県)とともに東京朝日新聞社主催のもとに行われ、「北海道大会」はこの年から設立された北海道中等学校競技聯盟とともに東京朝日新聞社は共同主催の体制で開催された。その他の大会は前年どうりであったため、東京朝日新聞社は共同主催を含め六大会の主催となる。

(5) 第十二回大会

全参加校数71校で開始された全国優勝野球大会も、大正期最後1926年(大正15年)の第十二回大会ではすでに337校にまで参加校が増加し、地方大会数も次に示すように一大会が増え二十二大会となる。その中で「北海道大会」は、前年に設立された北海道中等学校競技聯盟の単独主催もとで行われ、「東京予選」とともに東京朝日新聞社は後援という体制へ移行していく³²⁾。しかしながら、「関東大会」が新たに南北に分離し「北関東大会」(栃木県、群馬県、埼玉県)、「南関東大会」(千葉県、茨城県)となり、いずれも東京朝日新聞社主催のもとで開催されることとなる。したがって東京朝日新聞社は「奥羽大会」「東北大会」「甲信越大会」「北関東大会」「南関東大会」「神静大会」の六大会の主催、「北海道大会」「東京予選」の二大会の後援といった関与の広がり呈し、もはやこの時期には東日本における中等学校野球の地

方大会開催に関して、東京朝日新聞社は不可欠の存在となっていたことがうかがわれる。

地方大会に対して東京朝日新聞が展開したこのような関与の広がりとともに、「全国優勝野球大会」も顕著な発展を遂げていく。このことは一方で、「ヨーロッパ各国が戦場と化し、その影響でわが国の経済力が飛躍的に発展、いわゆる成金景気を生んだ結果、新聞の読者層も急激な伸張をみせた」³³⁾とする背景が全国紙成立の時代背景として存在し、このような背景が「全国優勝野球大会」の発展をうながす一因であったことも忘れてはならないところであろう。

おわりに

以上のように東京朝日新聞社が、「全国優勝野球大会」の成長期である大正期において、学生野球の発展に寄与していく立場を徐々に確立していったことを明らかにしてきた。すなわちそのことは、すでに大正期初期という時期において学生野球に対する立場に変化をみせた東京朝日新聞社が、徐々に「全国優勝野球大会」の地方大会に対して関与の輪を広げていくことによって、元来、組織運営においては別組織であったともいえる「東京朝日新聞社」と「大阪朝日新聞社」とが「総体」として捉えられるような状況を呈しつつあったことを意味するものであった。そしてそれが文字どおり「総体」として実質化するのには1940年(昭和15年)9月1日に東京朝日新聞と大阪朝日新聞の「東京」、「大阪」の文字がとれ、紙名(題号)が「朝日新聞」と統一されてからのことであると思われる³⁴⁾。なおこの1940年の機構改革に関して、全国通信会議(1940年)の中で朝日新聞社社長 村山長挙は「新聞も組織を新体制に順応させるべきだ。わが社は名古屋、九州も発展し独立性が強まった。ばらばらにならぬようにする必要があり、それが今度のわが社の新体制で、題字の統一もそれである。紙面も統制されてきて論説のみならず短評その他も四社が違った方向に出ることが絶対にならないように同じ指導精神で進むことになっ

たのは喜ばしい。…」³⁵⁾と訓示を述べている。つまりこの訓示は、この改革までは組織運営の様々な点において、各社(東京、大阪、名古屋、九州)が独立していたことをうかがわせるものであり、筆者のこれまでの指摘³⁶⁾をさらに実証しうるものであると考えられる。

最後に、本研究においては「全国優勝野球大会」に対する東京朝日新聞社の係わり方を中心に、大正期の地方大会の主催および後援を概観してきたので、その他の各地方大会については文末に資料を提示するにとどめたことを付言しておく。

資 料

【大正期における「全国優勝野球大会」

地方大会主催(後援)の変遷】

〈第一回全国優勝野球大会 1915(大正4)年〉

1. 東北野球大会
2. 関東野球大会 武俠世界社主催
3. 東海野球大会 富田中學主催
(第十二回東海五懸聯合野球大会)
4. 京津野球大会 大阪朝日新聞社京都通信部主催
5. 關西野球大会 美津濃商店主催
6. 兵庫懸野球大会 大阪朝日新聞社神戸通信部主催
7. 山陽野球大会 大阪朝日新聞社広島通信部主催
8. 山陰野球大会 大阪朝日新聞社山陰通信部後援
9. 四國野球大会 高松體育會主催
大阪朝日新聞社高松通信部後援
10. 九州野球大会 抜天俱樂部主催
大阪朝日新聞社福岡通信部後援

〈第二回全国中等學校優勝野球大会 1916(大正5)年〉

1. 東北野球大会 東京朝日新聞社主催
第二高等學校後援
2. 関東野球大会 東京朝日新聞社主催
3. 東海野球大会 豊橋中學主催
(第十三回東海五懸聯合野球大会)
4. 京津野球大会 大阪朝日新聞社京都通信部主催
5. 大阪野球大会 大阪高等商業學校主催
6. 紀和野球大会 大阪朝日新聞社主催

7. 兵庫懸野球大会 大阪朝日新聞社神戸通信部主催
8. 山陽野球大会 大阪朝日新聞社広島通信部主催
9. 山陰野球大会 大阪朝日新聞社松江通信部後援
10. 四國野球大会 高松體育會主催
大阪朝日新聞社高松通信部後援
11. 九州野球大会 抜天俱樂部主催
大阪朝日新聞社福岡通信部後援
12. 北陸野球大会 第四高等學校主催

〈第三回全国中等學校優勝野球大会 1917(大正6)年〉

1. 東北野球大会 東京朝日新聞社主催
第二高等學校後援
2. 関東野球大会 天狗俱樂部主催
東京朝日新聞社、武俠世界社後援
3. 東海野球大会 愛知一中主催
(第十四回東海五懸聯合野球大会)
4. 京津野球大会 大阪朝日新聞社京都通信部主催
5. 大阪野球大会 大阪高等商業學校主催
大阪朝日新聞社後援
6. 紀和野球大会 大阪朝日新聞社主催
7. 兵庫野球大会 大阪朝日新聞社神戸通信部主催
8. 山陽野球大会 大阪朝日新聞社広島通信部主催
9. 山陰野球大会 大阪朝日新聞社山陰(松江)通信部主催
10. 四國野球大会 高松體育會主催
大阪朝日新聞社高松(高知)通信部後援
11. 九州野球大会 大阪朝日新聞社福岡通信部主催
九州帝國大學野球部後援
12. 北陸野球大会 第四高等學校主催
(北陸關西野球大会)

〈第四回全国中等學校優勝野球大会 1918(大正7)年〉

(本大会は米騒動のため中止、予選のみが行われた)

1. 東北大会 東京朝日新聞社主催
第二高等學校後援
2. 関東大会 東京朝日新聞社主催
水戸天狗俱樂部、水戸商業學校、
茨木商業學校後援
3. 甲信大会 東京朝日新聞社主催
長野師範學校後援
4. 京濱大会 天狗俱樂部、武俠世界社主催
東京朝日新聞社後援
5. 東海大会 岐阜中學主催

- (第十五回東海五懸聯合野球大會)
- 6. 京津大會 大阪朝日新聞社京都通信部主催
 - 7. 大阪大會 大阪高等商業學校主催
大阪朝日新聞社後援
 - 8. 紀和大會 { 和歌山懸…紀伊教育會主催
奈良懸…大阪朝日新聞社奈良通信部主催
 - 9. 兵庫大會 神戸高等商業學校主催
大阪朝日新聞社神戸通信部後援
 - 10. 山陽大會 中國體育會主催
大阪朝日新聞社岡山通信部後援
 - 11. 山陰大會 大阪朝日新聞社山陰通信部主催
 - 12. 四國大會 香川懸體育會主催
大阪朝日新聞社高松通信部後援
 - 13. 九州大會 { 福岡懸…福岡日日新聞社主催
他懸…大阪朝日新聞社福岡通信部主催
 - 14. 北陸大會 第四高等學校主催

〈第五回全國中等學校優勝野球大會 1919(大正8)年〉

- 1. 東北大會 東京朝日新聞社主催
第二高等學校後援
- 2. 關東大會 東京朝日新聞社主催
- 3. 甲信大會 東京朝日新聞社主催
- 4. 京濱大會 天狗俱樂部、武俠世界社主催
東京朝日新聞社後援
- 5. 東海大會 大垣中學主催
(第十六回東海五懸聯合野球大會)
- 6. 京津大會 大阪朝日新聞社京都通信部主催
- 7. 大阪大會 大阪高等商業學校主催
大阪朝日新聞社後援
- 8. 紀和大會 { 和歌山懸…紀伊教育會主催
奈良懸…大阪朝日新聞社奈良通信部主催
- 9. 兵庫大會 神戸高等商業學校主催
大阪朝日新聞社神戸通信部後援
- 10. 山陽大會 廣島高等師範學校主催
大阪朝日新聞社廣島通信部後援
- 11. 山陰大會 大阪朝日新聞社山陰通信部主催
- 12. 四國大會 香川懸體育會主催
大阪朝日新聞社高松通信部後援
- 13. 九州大會 大阪朝日新聞社福岡通信部主催

- 14. 北陸大會 第四高等學校主催

〈第六回全國中等學校優勝野球大會 1920(大正9)年〉

- 1. 北海道大會 北海道大學、函館大洋俱樂部主催
東京朝日新聞社後援
- 2. 東北大會 第二高等學校主催
東京朝日新聞社後援
- 3. 關東大會 東京朝日新聞社主催
- 4. 甲信大會 東京朝日新聞社主催
- 5. 京濱大會 天狗俱樂部、武俠世界社主催
東京朝日新聞社後援
- 6. 東海大會 四日市商業學校主催
(第十七回東海五懸聯合野球大會)
- 7. 京津大會 大阪朝日新聞社京都通信部主催
- 8. 大阪大會 大阪高等商業學校主催
大阪朝日新聞社後援
- 9. 紀和大會 { 和歌山懸…和歌山懸體育獎勵會主催
大阪朝日新聞社和歌山通信部後援
奈良懸…大阪朝日新聞社奈良通信部主催
- 10. 兵庫大會 神戸高等商業學校主催
大阪朝日新聞社神戸通信部後援
- 11. 山陽大會 山口高等商業學校主催
大阪朝日新聞社山口通信部後援
- 12. 山陰大會 大阪朝日新聞社松江通信部主催
- 13. 四國大會 { 東部…香川懸體育會主催
大阪朝日新聞社高松通信部後援
西部…松山高等學校主催
大阪朝日新聞社松山通信部後援
- 14. 九州大會 佐賀懸體育協會主催
大阪朝日新聞社福岡通信部後援
- 15. 北陸大會 大阪朝日新聞社金澤通信部主催
第四高等學校後援

〈第七回全國中等學校優勝野球大會 1921(大正10)年〉

- 1. 北海道大會 北海道大學、函館大洋俱樂部主催
東京朝日新聞社後援
- 2. 東北大會 東京朝日新聞社主催
第二高等學校後援

16. 北陸大會 大阪朝日新聞社福岡通信部後援
大阪朝日新聞社金澤通信部主催
第四高等學校後援
17. 朝鮮大會 大阪朝日新聞社京城通信部主催
18. 臺灣大會 臺北體育協會主催
19. 滿州大會 遼東新報主催
旅順工科學堂後援

〈第十回全國中等學校優勝野球大會 1924(大正13)年〉

1. 北海道大會 東京朝日新聞社主催
2. 東北大會 東京朝日新聞社主催
3. 關東大會 東京朝日新聞社主催
4. 甲信越大會 東京朝日新聞社主催
5. 東京大會 中等學校野球聯盟主催
(中等學校野球リーグ戦)
東京朝日新聞社後援
6. 神靜大會 東京朝日新聞社主催
7. 東海大會 名古屋高等工業學校主催
大阪朝日新聞社名古屋通信部後援
8. 京津大會 大阪朝日新聞社京都通信部主催
9. 大阪大會 大阪中等學校野球聯盟主催
大阪朝日新聞社、
大阪高等商業學校後援
10. 紀和大會 和歌山懸體育獎勵會主催
大阪朝日新聞社和歌山通信部後援
11. 兵庫大會 神戸高等商業學校主催
大阪朝日新聞社神戸通信部後援
12. 山陽大會 大阪朝日新聞社岡山通信部主催
第六高等學校後援
13. 山陰大會 大阪朝日新聞社松江通信部主催
松江高等學校後援
14. 四國大會 松山高等學校主催
大阪朝日新聞社松山通信部後援
15. 九州大會 佐賀懸體育協會主催
大阪朝日新聞社福岡通信部後援
16. 北陸大會 大阪朝日新聞社金澤通信部主催
第四高等學校北辰會後援
17. 朝鮮大會 大阪朝日新聞社京城通信部主催
18. 臺灣大會 臺北體育協會主催
19. 滿州大會 遼東新報主催
旅順工科學堂後援

〈第十一回全國中等學校優勝野球大會 1925(大正14)年〉

1. 北海道大會 北海道中等學校競技聯盟、
東京朝日新聞社主催
2. 東北大會 東京朝日新聞社主催
3. 奧羽大會 東京朝日新聞社主催
4. 甲信越大會 東京朝日新聞社主催
5. 關東大會 東京朝日新聞社主催
6. 東京大會 府下中等學校野球聯盟主催
(中等學校野球リーグ戦)
東京朝日新聞社後援
7. 神靜大會 { 神奈川懸…神奈川中等學校聯盟
リーグ主催
静岡懸…東京朝日新聞社静岡通信
部主催
8. 東海大會 名古屋高等工業學校校友會主催
大阪朝日新聞社名古屋通信部後援
9. 京津大會 大阪朝日新聞社京都通信部主催
10. 大阪大會 大阪府下中等學校野球聯盟主催
大阪朝日新聞社後援
11. 紀和大會 和歌山懸體育獎勵會主催
大阪朝日新聞社和歌山通信部後援
12. 兵庫大會 神戸高等商業學校主催
大阪朝日新聞社神戸通信部後援
13. 山陽大會 大阪朝日新聞社廣島通信部主催
廣島高等學校後援
14. 山陰大會 大阪朝日新聞社鳥取通信部主催
15. 四國大會 松山高等學校主催
大阪朝日新聞社松山通信部後援
16. 北九州大會 大阪朝日新聞社福岡通信部主催
17. 南九州大會 第五高等學校主催
大阪朝日新聞社熊本通信部後援
18. 北陸大會 大阪朝日新聞社金澤通信部主催
第四高等學校北辰會後援
19. 朝鮮大會 大阪朝日新聞社京城通信部主催
20. 臺灣大會 臺灣體育協會主催
大阪朝日新聞社臺北通信部後援
21. 滿州大會 遼東新報主催

〈第十二回全國中等學校優勝野球大會 1926(大正15)年〉

1. 北海道大會 北海道中等學校運動競技聯盟主催
東京朝日新聞社後援
2. 奧羽大會 東京朝日新聞社主催

3. 東北大會 東京朝日新聞社主催
 4. 甲信越大會 東京朝日新聞社主催
 5. 北關東大會 東京朝日新聞社主催
 6. 南關東大會 東京朝日新聞社主催
 7. 東京豫選 東京中等學校野球聯盟主催
 (中等學校野球リーグ戦)
 東京朝日新聞社後援
 8. 神靜大會 東京朝日新聞社主催
 { 神奈川懸…神奈川中等學校リーグ
 主催
 靜岡懸…東京朝日新聞社靜岡通信
 部主催
 9. 東海大會 大阪朝日新聞社名古屋通信部主催
 10. 京津大會 大阪朝日新聞社京都通信部主催
 11. 大阪大會 大阪府下中等學校野球聯盟主催
 大阪朝日新聞社後援
 12. 紀和大會 和歌山懸體育獎勵會主催
 大阪朝日新聞社和歌山通信部後援
 13. 兵庫大會 神戸高等商業學校主催
 大阪朝日新聞社神戸通信部後援
 14. 山陽大會 山口高等商業學校主催
 大阪朝日新聞社山口通信部後援
 15. 山陰大會 大阪朝日新聞社米子通信部主催
 16. 四國大會 大阪朝日新聞社松山通信部主催
 松山高等學校後援
 17. 北九州大會 佐賀高等學校、佐賀體育協會主催
 大阪朝日新聞社佐賀通信部後援
 18. 南九州大會 第七高等學校鶴橋俱樂部主催
 鹿児島野球同交會、大阪朝日新聞
 社鹿児島通信部後援
 19. 北陸大會 大阪朝日新聞社金澤通信部主催
 第四高等學校北辰會後援
 20. 朝鮮大會 大阪朝日新聞社京城通信部主催
 21. 臺灣大會 臺灣體育協會主催
 大阪朝日新聞社臺北通信部後援
 22. 滿州大會 遼東新報主催

注) ・本資料は1915(大正4)年6月から1926(大正15)年8月に至る『大阪朝日新聞』及び『東京朝日新聞』の掲載記事より筆者が作成したものである。
 ・資料の表記はなるべく原史料の表記にもとずいた。

・第二回大会以降の順番は特に意味はないが地方大会数を確認する上で表記した。

注釈および参考・引用資料

- 1) 詳細については、秦真人・加賀秀雄『「野球害毒論争」(1911年)の実相に関する実証的検討—新聞各紙の論調分析を通じて—』総合保健体育科学、第13巻1号、1990年、pp.19-31.を参照
- 2) 朝日新聞大阪本社運動部 柴橋八郎「実った“夢の企画”大会誕生の周辺」『全國高等學校野球選手権大會五十年史』朝日新聞社、1968年、p.687.及び「全國中等學校野球大会のうぶ声」『朝日新聞の九十年史』朝日新聞社(大阪本社)、1969年、pp.296-298.参照
- 3) 同上
- 4) 秦真人「『野球害毒論争(1911年)』との関連における朝日新聞社への評価について—関係史料の分析を通じて—」(体育史専門分科会「1992年春の定例研究集会」における報告、1992年5月17日.)
- 5) 「1911年における野球論争の実証的研究(Ⅱ)—『東京朝日新聞』及び『大阪朝日新聞』の編集内容の相違をめぐって—』総合保健体育科学、第14巻1号、1991年、pp.33-38.
- 6) 「1911年における野球論争の実証的研究(Ⅲ)—『野球論争』から『第一回全國優勝野球大会』開催に至る朝日新聞の動向及び同紙にあらわれた学生野球観について—』総合保健体育科学、第15巻1号、1992年、pp.39-48.
- 7) 「全國優勝野球大会」『東京朝日新聞』(大正4年7月23日付).
- 8) 「勝者に光榮あれ」『東京朝日新聞』(大正4年8月15日付).
- 9) 「全國中學野球大會」『東京朝日新聞』(大正4年8月16日付).
- 10) 『東京朝日新聞』(大正4年8月19-24日付).
- 11) 大阪朝日新聞社記者 田村省三(本国)「本社主催全國優勝野球大会」『大阪朝日新聞』(大正4年7月2日付).
- 12) 「全國優勝野球大会」『大阪朝日新聞』(大正4年7月7日付).
- 13) 「全國優勝野球大会」『大阪朝日新聞』(大正4年7月8日付).
- 14) 同上.
- 15) 「参加する野球團體」『大阪朝日新聞』(大正4年7月25日付)
- 16) 雑誌『武俠世界』は、野球害毒論争を契機に1912年1月から創刊された。この創刊にあたっては「天狗俱樂部」(注の28)参照)が関与している。横田順弥『熱血兒押川春浪—野球害毒論と新渡戸稲造』三一書房、1991年、p.130,pp.170-171.
- 17) 同大会は、明治35年から愛知県立第一中等學校を

中心に近県の各中学校が毎年持ち回りで当番となり主催、大正9年の第十七回大会まで行われた。服部邦雄編纂『愛知一中野球部史』愛知一中野球倶楽部、1961年、参照。

- 18) 佐伯達夫談「関西予選開催についての障碍」『朝日新聞編年史別冊「野球大会回顧座談会」』朝日新聞社史編修室、1953年、pp.12-13.参照。
- 19) 詳しくは「…山陰道には数年前より現任松江中学校長西村房太郎氏の發起にて鳥取島根丹後但馬に渡り大仕掛けの野球大会を催し年々隆盛に赴きつゝ、ありしが元來犬と猿との鳥取島根兩懸民の特性之に發露して一勝一敗復讐につぐ復讐を以てし年毎に野次の騷擾烈しく一昨年米子に於て開催せる際の如きは其極度に達し松江中學選手に對し米子中學野次群は猛烈なる妨害を試み果ては石を投ぐる者さへありて如何なる變事を生ずるやも圖り難しとて松江中學監督教師は試合を中止せしめて引上げたりかくと見たる米中野次隊は之に尾して旅館に至り停車場に送りあらゆる凌辱を加へたるよりかくと聞きたる西村松江中学校長は其無禮を激怒し我校生徒をして再び米中のグラウンドを踏ましめずとて断然山陰野球大会に出席せしめざる事としたりかくて山陰野球界も一頓挫を來し然のみならず本年六月の島根縣中等學校長会議に於て山陰庭球大会も共に之を廢し鳥取懸に對しては絶対に對校競技をなさしめざる事と決議したり…」
「山陰野球大会豫選會 本社山陰通信部後援」『大阪朝日新聞』(大正4年7月29日付)参照。
- 20) 「四國野球大会」『大阪朝日新聞』(大正4年7月16日付)参照。
- 21) 「本社の全國優勝野球大会に對し九州男子の代表者を選抜するの目的を以て福岡市在住の紳士連に依つて組織され居れる抜天俱樂部(幹事森繁、舊慶應選手高濱徳一、舊早大選手陶山、現九州大學選手井上謙一の諸氏)主催となり本社福岡通信部後援の下に來る七月三十一日、八月一日の二日間(參加チーム多數の場合は時日を延長す)福岡市東公園福岡商業學校グラウンドに於て開催する…」『九州野球大会』『大阪朝日新聞』(大正4年7月18日付)参照。
- 22) 「東北關東中學野球大会」『東京朝日新聞』(大正5年6月13日付)。
- 23) 同 上。
- 24) 同 上。
- 25) 「關東大會野球選手(一)～(八)」『東京朝日新聞』(大正5年7月14-24日付)。
- 26) 例えば7月26日、8月2日付『東京朝日新聞』にはその顯著なものがうかがわれる。
- 27) この要因に関しては、次のような背景も一部関与していることを提示するととどめる。それは「大阪朝日」の1915(大正4)年の勘定報告書により前年までの販売収入が減少傾向にあったことを示唆し

ている。しかしながら、1916(大正5)年の同報告書によると、「本期間ノ新聞販賣狀況ハ成績頗ル良好ニシテ、之ヲ前期ニ比セハ一日ノ部數五萬九千參百七拾參部、此料金六百五拾參錢參厘ヲ増加シ、擴張無代紙ニ於テハ却テ一日ノ部數五百五拾ニ部ヲ減セリ。右増加配率ハ大阪市内及附近ヲ最トシ、畿内地方之二次キ他ハ關西地方一般并ニ朝滿地方に分布セリ(以下略)」とある。實際は「第一次大戰の好景氣にともなう、民衆の購買力増大に支えられ(中略)戦争やロシア革命など重要事件が國際的に相ついで發生し、それを速報したことも、民衆と『大阪朝日』とを接近させる原因となっていた」*と分析されているが、時期的にみて第一回全國優勝野球大会の開催の影響もその一因として考えられる。東京朝日新聞も大阪朝日新聞のこのような販売狀況の好転を、全國大会開催の影響である分析し、販売拡大の一環として態度を一転したと考えることも難しくないと思われるところである。

*津金沢聰広、山本武利他『近代日本の新聞広告と経営—朝日新聞を中心に』1979年、朝日新聞社、p.299

- 28) この倶楽部は、「1909(明治42)年5月、押川春浪を題目として、早稲田系のバンカラ人たちを中心にして誕生したスポーツ社交団体」で、メンバーは1915(大正4年)の時点で飛田忠順(穂洲)、河野安通志、木下東作、中山再次郎等、総勢百五名であった。横田、前掲書、pp.23-39。
- 29) 長谷川万次郎(如是閣)「社告」『大阪朝日新聞』(大正7年8月17日付)。及び『全國高等学校野球選手権大会史』朝日新聞社、1958年、pp.160-162。
- 30) 『東京朝日新聞』(大正8年8月5日付)。
- 31) 『朝日新聞七十小史』朝日新聞社、1949年、p.159。
- 32) 第二次世界対戦後、文部省の要請により全國中等學校野球連盟(後の全國高等学校野球連盟)が結成され、後年各地方大会においても連盟主催、朝日新聞社後援の体制へと移行していく。しかしながら、この連盟の発足にさきがけて、すでにこの時期に東京と北海道のほか神奈川、大阪においてもそれぞれの中等學校野球聯盟主催のもとに開催されていたことを補足しておく。「復活第一回(第二十八)大会を野球連盟と共催のいきさつ」前掲書『朝日新聞編年史別冊「野球大会回顧座談会」』、pp.85-110.参照。
- 33) 岡満男「全國紙誕生の条件」『近代日本新聞小史—その誕生から企業化まで—』ミネルヴァ書房、1969年、p.128。
- 34) 「本紙の題號を統一紙面刷新と共に一日實施」『東京朝日新聞』(昭和15年8月28日付)。
- 35) 「朝日新聞の新体制」『朝日新聞社史大正・昭和戦前編』朝日新聞社、1991年、p.542。
- 36) 〈はじめに〉を参照

野球論争の実証的研究

なお引用史料中の漢字については、一部新字体を用いたことを付言しておく。

(1992年12月3日受付)

